慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	十八世紀英仏社会思想の発展とウィリアム・ゴドウィン
Sub Title	A study of William Godwin, refering to the development of English and French social thoughts in the eighteenth century
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.8 (1957. 8) ,p.718(46)- 733(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19570801-0046
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570801-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十八世紀英仏社会思想の発展と

ウィリアム・ゴドウィン

白井　厚

一、イギリスにおけるフランス革命
二、自然法から功利主義へ
（形而上学から唯物論へ）
三、資本主義批判と財産論
（無政府主義・共産主義）

一、イギリスにおけるフランス革命

M・ベアによれば、十八世紀の後半は「特殊的には英国史上における、一般的には人類史上における、永遠に記憶すべき時代」[1]である。つぎつぎと採用された新しい機械によって更に勢いを得た資本主義的生産方法は、旧来の技術や手工業の独占権を破壊し、支配的な地位を確立した。農業国は〝世界の工場〟となり、村落の旧い生活習慣は衰退して、新しい工業都市が生まれた。人口は急速に増大し、新しい生産力は莫大な富を創造し、これまでの経済学者達の想像以上に、全能の活動力が展開されたのである。

このような変動は、当然人々の心の中においても、伝統的な権威に対する批判を呼び起し、自由主義思想は、産業家と知識人の間に広く迎えられた。しかも当時の思想界に最大の影響を与えたものは、フランス革命の成功である。欧州最大のこの専制君主政体の崩壊は、その革命の激しさの故に、また、この革命を押し進めた精神の支柱が、デカルトの合理主義以来、人類進歩の理想を追って花と咲き乱れた啓蒙思想であったが故に、海峡を越えたこの先進国にも一つの時期を劃すほどに重要な意義を持っていた。ルソーやディドロの新しい理性の光が、大陸の至る所でその輝きを増した時、イギリスにおいても啓蒙精神に人類の理想と希望を托し得るかの如く考えられた。理性の前に、古き権威の愚かさはあまりにも明らかであり、前途に不可能なものは存在しなかった。桂冠詩人サウジーの回想によれば、

〝古きものはすべて進ぎ去るかの如く、人類の全く新しき出発のみが夢みられた〟[2]

のである。

だが、一転して当時の経済生活を眺めれば、それはイギリスにおいてもきわめて悲惨なものであった。囲繞運動はますます拡大され、「十八世紀の進歩は、法律そのものが今や全く人民共有地を盗む道具となるという点に現われる」[3]という状態で、大農場は小農場にとって代り、生活の根拠を失った農民は都市に流れ込んだ。製造業においても、木綿業等の一時的な賃金騰貴があったとはいえ、産業革命の圧力は労働者の経済条件を著しく低下せしめ、一方における資本家の莫大な富の蓄積に対応して、ディスレーリのいう〝二つの国民〟[4]が形成され、貧民問題は十八世紀末の重要な関心事となったのである。

このような理想と現実の激しい対比を前にして、新しく興ったブルジョアジーは、既成の土地貴族＝大ブルジョア連合政権の妥協に反撥して、政治上の改革を要求するいくつかの急進的団体を組織し、また新しい生産力によって没落する独立小生産者達は、主として道徳的な見地からではあったが、この現状、更には資本主義に対する批判的見解を表明した。また、熟練労働者達も、普通選挙権と議会制度改革のために職業の相違を越えて結社を作り、フランス革命に鼓舞されて、萌芽的な労働運動を始めた。これらに対して政府の弾圧は相続き、各階級からの思想の応酬が加えられて、ここに〝イギリスにおけるフランス革命〟と呼ばれる時代[5]が展開される。

この時代は、宗教界で信望厚い Dr. Richard Price が、名誉革命記念協会で述べた講演 A Discourse on the Love of our Country（一七八九年一一月四日）によって口火を切られた。この中で、彼はフランス革命を讃美して、それが名誉革命の原理と通ずることを強調し、現実のイギリスの状態を批判して、良心の自由、権力への反抗、統治者を選ぶ権利を主張したのである。これに対して、保守陣営の Edmund Burke は、Reflections on the Revolution in France, 1790 を著し、社会有機体説の立場から、美文をもって伝統の権威を主張し、共和制と革命を攻撃した。それはまた、僅か一、二年の間に、大小約三十八種の反論を呼び起したといわれる。[6]後にゴドウィンの妻となった Mary Wollstonecraft は、バークの著が出て数週間の後に、早くも A Vindication of the Right of Men, in a Letter to the Right Honourable Edmund Burke; occasioned by his Reflections on the Revolution in France, 1790 を出版し、Sir James Mackintosh の反駁論、Priestley の公開状、Paine の The Right of Man, 1791-2. がこれに続いた。最後に、バーク批判の総決算として、ゴドウィンが、〝国富論以来の名著〟[7] An Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on general Virtue and Happiness. 2 vols. Lond., 1793. を刊行した。

この頃の思想界を、大体四つに分けることができる。[8]最右翼が土地貴族の代表たるトーリー党で、小説家スコットが編集する機関誌 Quarterly Review を持つ。次に位するのがホイッグ党で、機関

誌は Edinburgh Review、主としてロンドンの大商人達の支援を受けて、やや資本家的色彩を帯び、その代表者が、例の弾圧を行ったピットである。左翼に近いのが、ベンサムを中心とする功利主義者達で、典型的な産業ブルジョアジーのイデオローグとして、革命的な思想を攻撃すると同時に、むしろ主力をトーリー＝ホイッグ批判に向けて、議会制度の改革を主張し、後に選挙法の改正を通じて、支配的な勢力を掴るに至った。最左翼が、フランス革命の思想に共鳴する急進主義者、ロマン主義者の一群 R. Price, T. Paine, H. Took, W. Godwin, J. Thelwall, Coleridge, Shelley, Southey, Wordsworth, T. Hardy とロンドン通信協会の人々、並びに T. Spence である。この階級的基盤は、既に述べた如く急進的な新興ブルジョアジー、独立小生産者、熟練労働者等と複雑であるが、彼等こそが最も大衆に近く、土地改革論、社会主義、共産主義、無政府主義、ロマン主義、無神論等の先駆的な主張によって、後のリカード派社会主義、空想的社会主義、チャーチズム等に、大いなる遺産を与えたのである。

ここで、かれらを、資本主義を永遠にして最良の自然秩序と考える者と、その批判者とに分類すると、ベンサム、リカードはいうに及ばず、ロンドン通信協会の人々も、ペインですらも、この生産方法に終りがあろうとは夢にも思わなかった。逆に、古い伝統に固執したバークが、自然法を批判して功利主義に近づきながらも、露骨な利害打算によって動く秩序に感情的な嫌悪を示し、地主的なマルサスは、「ブルジョア的生産が、革命的なものでなく、歴史的な契機でなく、単に〝古い〟社会のより広汎なより好都合な物質的基礎を形成する限りにおいて、それを歓迎」[9]し、「ブルジョア的生産の矛盾を隠すことに関心をもつどころか、むしろこれを暴露することに関心をもっていた」[10]のである。急進派の中にあって、宗教や政治の改革を主張するだけではなく、権力と財産制度の強いつながりを見て、〝市民社会〟の秩序に根本的な疑いの眼を向けたのは、ディガーズ等の貧農の本能を別とすれば、フランスでは J. Meslier, A. N. Morelly, G. B. Mably, F. N. G. Babeuf 等の啓蒙社会主義であり、イギリスでは、ゴドウィンの無政府共産主義のみであった。

もちろん、この時期には労働者階級の成熟と自覚は不十分であって、労働者の立場から、労働者の理論によって資本主義を批判し、労働者を主体とした改革のプログラムを作ることはなかった。従って、これら急進主義者が資本主義的な政治・財産制度を批判したとしても、その武器は、封建制度を攻撃したブルジョアジー自身のものか、または資本主義以前（更には原始キリスト教の時代）を讃美する復古的な農民のイデオロギーを用いるほかはなかった。そしてこれらの理論自体の階級性が明らかになるまでは、プロレタリアが自己の階級性を自覚した理論を持つまでは、彼等の思想は常に実現の基盤を持たず、歴史や階級を超越して、空想的ならざるをえなかった。しかし、マルクスに至って結晶するプロレタリアの理論は、いずれもこのようなブルジョア理論の胎内で育ち、急進主義の批判

精神に鼓吹されて、労働運動の成熟と共に生まれる。このような意味で、フランス唯物論の成果を導入したこの〝イギリスにおけるフランス革命〟は、近代社会主義のための受胎期であり、「近代の二人の最大の実際的哲学者、ベンサムもゴドウィンも、特にゴドウィンは、プロレタリアの殆んど独占的な財産」[11]であった。

注（1） M. Beer; A History of British Socialism, vol. I, 1923, p. 95. 加田哲二訳一一四頁。ただし、訳文は必ずしも邦訳によらない。以下の引用においても同様である。

（2） D. Fleisher; William Godwin, A Study in Liberalism, 1951, p. 19.

（3） K. Marx; Das Kapital, Volksausgabe besorgt vom M.-E.-L.-Institute, Bd. I, 1932, S. 763. 長谷部訳（ロ評版）一五九〇頁。

（4） A. E. Rodway; Godwin and the Age of Transition, Lond., 1952, p. 18.

（5） ブレイルスフォードは、これをプライスの講演からシェリーの〝Hellas〟までの二十二年間としている。H. N. Brailsford; Shelley, Godwin and their Circle, p. 7.

（6） W. P. Hall; British Radicalism 1791–1797, 1912, p. 75.

（7） 大河内一男「社会思想史」一四三頁。

（8） 河合栄治郎「社会思想史研究」一三九頁。

（9） Theorien über den Mehrwert, Bd. III, S. 50. 改造社版M・L全集第十一巻六五頁。

（10） a.a.O., S. 57. 訳七一頁。

（11） F. Engels; Die Lage der Arbeitenden Klasse in England. M.-L. Gesamtausgabe, Bd. IV, Berlin, 1932, S. 227. 訳、マル・エン選集、補巻2、三五九頁。ただしこれは若き日のエンゲルスの書であることに注意。殊にベンサムの評価には問題がある。

二、自然法から功利主義へ

（形而上学から唯物論へ）

近代自然法は、ルネサンスのヒューマニズムと宗教改革を期として復活形成され、中世の神学的権威への反抗として、王権と旧特権階級に対して新たに興りつつあったブルジョアジーのイデオロギーとして主張された。それだから、その特徴は、世俗的であり、合理的であり、[1] 個人主義的であり、伝統を破壊するものであり、快楽的であり、何よりも経験的[2]であった。それは、例えばロックにおいて明らかなごとく、市民的自由と財産の神聖、社会契約説と労働財産説（自然財産権説）という当時のブルジョアジーの政治的要求の表明であると同時に、またそれ故に、それは先験的な、超越的な独断原理ではなく、経験主義的、内在的な科学的原理として、ニュート

ン力学の成果に対応して〝自然〟の新しい機械論的な説明を試み、社会を、人間の精神からは独立した客観的因果の系列として、体系的、唯物論的に把握する手段となった。近代自然法のこの二つの面（政治的主張と社会の客観的把握）は、きわめて重要なものである。いうまでもなく、前者は強力な社会思想として各国のブルジョア革命の精神的武器となり、後者は、トマスの場合とは打って変った唯物論的な内容を示して、社会科学、殊に経済学の成立を助けたからである。[3] 従って、自然法は神によって命令、制定されたと説かれ、神の概念がその中にあまねくいきわたっているとしても、それは正統派的教会至上の中世の教理とは異なっていた。逆に、原罪のドグマを拒否して現実の人間理性が尊重され、自我の意識が拡大されて、例えば自己保存（ホッブス）、所有権（ロック）、利己心（スミス）として把握された。ここに、自然法に浸透する功利主義があるのである。ホッブス[4]は、自己保存と快楽追求をもって、全ての行為を支配する原理と考え、かかる平等な打算的個人を主体とする原子論的社会観、国家支配の是認を、神学からではなく、ブルジョアジーの理性と経験とから引き出した。ロックは、更に本有観念を否定して、「後年のベンサム主義の真の創始者」[5]となった。即ち、人間の心は生まれた時には白紙 tabula rasa であって、その後の精神の形成は環境によるのであり、善悪の規準は本有的ではなくて、[6] 快楽を増大し苦痛を減少させるものを善と呼ぶのだという彼の考えは、身分制度に対立して自由を求めるという政治的要求を含むと同時に、哲学的には感性の経験に基礎をおく唯物論であり、人間の慾望を自然なものと見て、道徳と社会哲学を地上の世界に引き下すものであった。これらは、自然法が示唆した社会の客観的把握の方向であり、更に根本的には、「人間相互の全ての雑多な諸関係を、有用性の一つの関係の中に解消する外見的不合理、かかる外見的には形而上学的な抽象は、近代市民社会の内部においては、全ての諸関係は一つの抽象的な貨幣的、暴利営業的関係の下に実際には包摂されるということ」[7]から生じているのである。

かくて功利主義は、近代自然法が重視した人間行為の規準を、より唯物論的に表現したものといい得よう。自然法に対しては、その宗教的宿命観、理神論、神秘的な楽天観、非歴史性、論理上では未証明前提の誤り等[8]を指摘し得る。だが、近代自然法は同時に経験科学的側面を持っていた。そしてその面を功利主義に徹することは、それが事実としてのブルジョアジー心理の表現であり、かかる功利的関係が現実の経済諸関係の反映である限りにおいて、またそれが〝自然〟の無目的な、没意味的な把握に近づく限りにおいて、まさに客観的であり、唯物論であり、一つの進歩であった。その故に、〝功利論の本来的科学は経済学〟であって、[9] それは重農主義者達によって体系化され、スミスを経て、自然法を払拭した功利主義者リカードへと発展したのである。

それでは、近代自然法の社会批判としての面はどうであろうか。それは古き権威への反抗として主張され、その豊富な内容の故に、幸福主義、個人主義、自由・平等・共有の理想社会観、私有財産観、契約説による国家批判、革命権等の思想が、以後の社会思想、殊に社会主義に及ぼした影響は非常なものであった。[10] だがその中には、〝自然〟としての社会の客観的な把握の場合と同じように、やはり功利がその主張の基礎に含まれていた。フィジオクラートによれば、〝自然の秩序〟とは神が人類の幸福を意図する秩序であるし、[11] ラスキは、懐疑論の背景にも効用を、[12] 宗教的寛容の主張にも費用との関係を見ている。[13] そして功利主義は契約説や形而上学的な権利の概念などを批判して、資本主義生産の進展と共に、次第に独立の社会思想となるのである。

ここで、功利主義の階級的性格とその限界を明らかにせねばならない。もちろん功利主義は、封建的な権威に対しては、合理的な批判としてきわめて有効であった。だがそれは、近代自然法と同様に、或いはそれ以上に非歴史的な論理であった。それは、社会の発展については観念論[14]で、[15] 歴史的な人間存在を、単に快楽と苦痛を感ずる生理現象の主体としか見ず、人間相互の複雑な諸関係、とりわけ階級関係等の質的な事実を、功利という一語の量的現象に解消してしまう解毒剤であり、営利的な、搾取的な制度を最良の秩序として合理化し、利益と奢侈の無制限な追求を讃美するという、いずれの面から見てもブルジョア的な論理であった。このブルジョア的な抽象が、一般の論理として、神の摂理の手を借りずに通用するに至ったのは、まさに産業革命によって産業ブルジョアジーの勝利が確立した十九世紀のことである。従って自然法→功利主義という過程が、ジェントリー（ホッブス）、ヨーマンリー（ロック）、マニュファクチャラー（スミス）→勝利した産業ブルジョアジー（ベンサム）という背景を持つ限りにおいて、功利主義は、社会思想としては革命的性格を抜き去られた退歩を意味する。

しかしながら、その社会思想としての真の面目は、実は海峡を越えたフランスにおいて輝きを増していた。その社会哲学は、絶対王制の圧力の下に、農民は疲弊し、市民はその自由な経済活動を抑えられていた十八世紀に、不合理な体制を攻撃する恰好の武器として、唯物論者の間で研ぎすまされたのである。エルヴェシウスは、唯物論を直接社会と関連させて理解し、生まれつきの知能は平等であること、経験と教育は全能であること、個人の利害があらゆる道徳の基礎であることを主張して、そのために合理的な社会秩序を造ることを要求した。更にドルバックは、個人の解放、競争、利益の追求を謳歌して、古い封建的搾取形態に対立した。けれども、同時にそのことは、「英国人において見出される積極的な経済的内容を彼等の理論から取り去った」[16] こととなったのである。このように、「功利及び搾取の理論の進歩の諸段階は、ブルジョアジーの種々の発展時期と正確に連関し」、[17] 自然法の中に統一して含まれていた社会思想と経済学は「戦闘的ではあるがなお未発達なブルジョアジー」と、「支配しつつある発展したブルジョアジー」に対応する、フランスとイギリスの功利主義に分裂して発展した。そして前者はフラ

からも理解されよう。だがもちろん、デカルトやライプニッツの本有原理は、形而上学の色彩がより濃いものであって、その積極的な市民精神の内容をかくしている。従って、市民社会の成熟度に従って、ルトリンズム→合理主義哲学→近代自然法→功利主義、という形而上学から唯物論への移行をたどり得よう。

（7） K. Marx; Die Deutsche Ideologie. M.-E. Gesamtausgabe, Bd. 5, S. 337-8. 邦訳ナウカ社版五五四頁。

（8） 気賀健三「社会的進歩の原理」一一一頁以下。

（9） K. Marx; a.a.O., S. 388.

（10） 平井新「近代社会思想史」五四頁。

（11） Gide et Rist; Histoire des Doctrines Economiques, I, 1947, p. 9. 宮川訳上巻一二頁。

（12） H. J. Laski; The Rise of European Liberalism—An Essay in Interpretation, 1936, p. 173. 石上訳一七五頁。

（13） Ibid., p. 131. 訳一二八頁。

（14） 功利説の歴史観における観念論とは、つぎのことである。原子論的社会観から、社会的関係を個人的なものに還元し、あらゆる社会現象を永遠な人間本性から導びこうとすること。従って歴史的な人間存在は自然の中に解消されること。かかる人間本性にとって不都合な社会を、理性の啓発によって改善しようとすること。かくて、〝人間は環境の産物である〟という啓蒙思想の中には、同時に〝賢人が社会において支配的役割を果す〟という考え方がある。

（15） 功利主義が唯物論であるというのは、あくまで相対的な意味であって、神の概念が消滅したとしても形而上学を脱してはいない。この点について、G. Myrdal は、その著 Das politische Element in der nationalökonomischen Doktrinbildung. Aus dem schwedischen übersetzt von Gerhard Mackenroth. Berlin. 1932. において、功利説は先験的調和観を前提としているから、自然法的性格を持っていると主張している。彼によれば、前者は、客観的政治規範を与えようとする等々の理由で、後者の思弁に等しい。

（16）（17） K. Marx; a.a.O., S. 390.

（18） a.a.O., S. 391.

（19） フランス唯物論と社会主義、共産主義の関係については、Marx, Engels; Die Heilige Familie und Andere Philosophische Frühschriften. Bücherei des Marxismus-Leninismus. Bd., 41. S. 253-265. 参照。

（20） 一般には、自然法系の社会主義者の方が、功利主義系の論者よりラディカルである。その理由は、後者がより成熟したブルジョアジーの思想を受けついで、自由主義を基調とするのに対し、前者は直接に平等、革命権等から出発することにも求められよう。ただし、功利主義の帰着点は現在でもまだ不明確であって、ファビアン主義に限定したり、或いは逆にケインズの如く、ゴドウィンもマルクスも共にベンサムの伝統の中に含めることは問題であるし、また毛沢東の〝プロレタリア的な、革命的な功利主義〟（延安文芸座談会における講話）という考え方もある。帰着点については、木村正身「十九世紀イギリス思想史の若干問題」一橋論叢五月号参照。

三、資本主義批判と財産論

（無政府主義・共産主義）

ゴドウィンの主著「政治的正義についての研究」は、版を重ねるに従ってややその主張を変えたが、第三版においてまとめられた主な内容はつぎのようなものである。

Ⅰ 道徳及び政治研究の真の対象は、快楽または幸福である。快楽は、外部感覚によるものよりは、知的な感情、同情、自己是認による快楽の方が良い。

Ⅱ 政府は人類の無知と誤謬によって生み出され、不正を行い、財産の不平等を永久化した。

Ⅲ 独立がなくては幸福になり得ない。独立に対する侵害が最も少なくて、安全が維持されることが望ましい。

Ⅳ 正義とは快楽または幸福の最大量を生み出す原理である。それは普遍的で、利己心の放棄を要求する。

Ⅴ 一般的な利益のために最善を尽くすことは義務である。

ンス革命を期としてイギリスに逆流し、その戦闘的な内容は、没落過程の小生産者や知識人の魂を揺り動かしたのである。「搾取理論のその後の発展は、ゴドウィンによって、だがしかし特にベンサムによって進行した。」[18] ベンサムは、ブルジョアジーの立場から、これに経済的な内容を取り入れたが、同時に営利秩序の単なる弁護人に堕してしまったのに対し、ゴドウィンは、フランス人の旺盛な批判精神[19]を学んで、これを私有財産攻撃の武器に転用してしまった。功利の説によって資本主義を批判した改革論者[20]として、オーエン、タムソン、グレー等を数え得るが、ゴドウィンは、その先駆であり、最もフランス唯物論に近いといいうべきであろう。

注（1） 自然法の合理性については A. P. D'Entrèves; Natural Law, 1948. 参照。

（2） 大田可夫「イギリス社会哲学の成立」参照。

（3） 水田洋「社会思想小史」九六頁。

（4） E. F. Heckscher; Mercantilism, 1934, vol, 2, p. 271.

（5） H. J. Laski; Political Thought in England, Locke to Bentham, 1948.

（6） これは英国経験論の基調をなす命題であるが、必ずしも大陸の合理主義と全く別のものではなくて、多分に共通する性格を持っている（「人間悟性論」加藤卯一郎氏訳序参照）。これは、この双方が結局は中世的理念に対立する精神の産物であることから理解されよう。だがもちろん、デカルトやライプニッツの本有原理は、形而上学の色彩がより濃いものであって、その積極的な市民精神の内容をかくしている。従って、市民社会の成熟度に従って、ルトリンズム→合理主義哲学→近代自然法→功利主義、という形而上学から唯物論への移行をたどり得よう。

（7） K. Marx; Die Deutsche Ideologie. M.-E. Gesamtausgabe, Bd. 5, S. 337-8. 邦訳ナウカ社版五五四頁。

（8） 気賀健三「社会的進歩の原理」一一一頁以下。

（9） K. Marx; a.a.O., S. 388.

（10） 平井新「近代社会思想史」五四頁。

（11） Gide et Rist; Histoire des Doctrines Economiques, I, 1947, p. 9. 宮川訳上巻一二頁。

（12） H. J. Laski; The Rise of European Liberalism—An Essay in Interpretation, 1936, p. 173. 石上訳一七五頁。

（13） Ibid., p. 131. 訳一二八頁。

（14） 功利説の歴史観における観念論とは、つぎのことである。原子論的社会観から、社会的関係を個人的なものに還元し、あらゆる社会現象を永遠な人間本性から導びこうとすること。従って歴史的な人間存在は自然の中に解消されること。かかる人間本性にとって不都合な社会を、理性の啓発によって改善しようとすること。かくて、〝人間は環境の産物である〟という啓蒙思想の中には、同時に〝賢人が社会において支配的役割を果す〟という考え方がある。

（15） 功利主義が唯物論であるというのは、あくまで相対的な意味であって、神の概念が消滅したとしても形而上学を脱してはいない。この点について、G. Myrdal は、その著 Das politische Element in der nationalökonomischen Doktrinbildung. Aus dem schwedischen übersetzt von Gerhard Mackenroth. Berlin. 1932. において、功利説は先験的調和観を前提としているから、自然法的性格を持っていると主張している。彼によれば、前者は、客観的政治規範を与えようとする等々の理由で、後者の思弁に等しい。

（16）（17） K. Marx; a.a.O., S. 390.

（18） a.a.O., S. 391.

（19） フランス唯物論と社会主義、共産主義の関係については、Marx, Engels; Die Heilige Familie und Andere Philosophische Frühschriften. Bücherei des Marxismus-Leninismus. Bd., 41. S. 253-265. 参照。

（20） 一般には、自然法系の社会主義者の方が、功利主義系の論者よりラディカルである。その理由は、後者がより成熟したブルジョアジーの思想を受けついで、自由主義を基調とするのに対し、前者は直接に平等、革命権等から出発することにも求められよう。ただし、功利主義の帰着点は現在でもまだ不明確であって、ファビアン主義に限定したり、或いは逆にケインズの如く、ゴドウィンもマルクスも共にベンサムの伝統の中に含めることは問題であるし、また毛沢東の〝プロレタリア的な、革命的な功利主義〟（延安文芸座談会における講話）という考え方もある。帰着点については、木村正身「十九世紀イギリス思想史の若干問題」一橋論叢五月号参照。

権利とは、こうして生じた利益に対する個人の請求権である。

Ⅵ　人々は感情によって行為し、理性はその感情を比較考量する。故に、理性の進歩によって社会的条件は改善される。

Ⅶ　知識によって理性は明晰強固になる。知識に限界はないから、社会は永久に改善されるし、それを固定化する制度は有害である。

Ⅷ　高級な快楽は健全な悟性に結び付いている。健全な悟性は、研究の自由、簡素な生活様式、知識を養うための余暇と結び付いている。従って、不平等な財産の分配は望ましくない。[2]

彼の思想の中には、非常に多くの人々の影響が見られるが、[3] Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴが功利主義の伝統の下にあることは明らかであろう。彼は、ヒュームにならって社会契約説を批判[4]し、ペイン等の自然権の概念を否定[5]し、所有権の基礎を投下労働に求める考えもしりぞけて、自然法よりは功利主義に近かった。だが彼の考えは、エルヴェシウスの一方の後継者ベンサムとはかなり趣きを異にしていた。アレヴィは、ゴドウィンにとって人間は本質的に〝快苦〟を感ずるよりは〝知的〟〝合理的〟存在であり、生産物を交換するよりは思想を交換するものであったから、また法律と処罰に対する概念の批判に功利の原理を用いなかったから、純粋の功利主義者ではなかったと述べ[6]、プリーストリーは、彼は快楽の質的尺度を導入したことによって、感覚の直接的快楽の強さと価値を賤めたことによって、また、最高の快楽は徳の追求によって得られると主張することによって、

功利主義の体系を覆えしたといっている。[7] 更に、プリーストリーの解釈によれば、ゴドウィンの道徳哲学の中には、合理主義とフランス功利主義という二つの伝統があり、彼は功利主義の機械論的必然論には自由意志の理論を、個人の快苦という主観に価値を求める相対主義には絶対的な価値を、利己主義に対しては合理的仁愛を、報酬と罰による教育の体系に対しては自由な個人判断を強調する体系を、対立させた。……結局、ゴドウィンの倫理論は、エルヴェシウスや厳格な功利主義者が否定する三つの仮定、即ち利他主義の可能な人間の性格、一般的善を促進し期待することに最高の快楽を見出す、全体の善は個人の善と一致するという考えの上に立っていたとのことである。[8]

けれども、功利主義思想というものは、常に純粋に感覚的に説かれていたのではなく、それには後のJ・S・ミルに見られるような人格的合理主義の要素も存在したし、同時にまた、民主主義や自由主義は、必ずしも功利の原理との論理的な関連なしに[9]主張されてきた。従ってこの点でミルとゴドウィンを区別することは困難であろう。[10] ただゴドウィンの場合には、快楽の質的区別、理性への信頼がより強固であり、それが蓄積財産の制度（彼は封建社会と区別して市民社会をこう呼んだ）への不信と共に、無政府主義、共産主義にまで至ったところに、その特殊な性格があるのである。

功利主義というものが、経済社会の現実の営利関係と共に発展したことは既に述べた。そこで、エルヴェシウスもベンサムも、封建的土地貴族が自己の享楽を排他的に特権化したのに対して、〝自由、平等、所有およびベンサム〟（K.Marx; Das Kapital, Bd. I, S. 184.）が独り支配的に行われる商品交換の楽園を背景に、その生活条件を抽象して、社会が等質な感覚的個人からなるという擬制から出発した。そしてこのような感情的な人間把握は、デカルトやパスカルの哲学、コルネーユやラシーヌやモリエールの古典に現われた理性的人間像に比べて、キリスト教神学からの人間解放であり、まさに地上的な人間感情のそのままの肯定として、近代ヒューマニズムの確立を告げるものである。[11] だがもちろん、階級社会の人間が快楽や苦痛を同様に感ずるわけではないので、このような非現実的な抽象は、一面において架空の道徳論に転化してしまう。そこで、かかる偽善の経済的基礎を指摘し得る理論が未だ現われないとすれば、当然に産業革命の過程で没落しつつあった独立小生産者達が、この快楽等質という抽象に対して、その抽象を可能ならしめる生活諸条件もろともに、批判を加える可能性を与えるのである（この批判の正当性は、産業革命以後の思想家ミルによって、その生活諸条件とは切り離されて確認された）。ゴドウィンの思想のきわめて道徳的な、理性的な性質は、彼がカルヴィニズム、プラトニズム等の影響を強く受けているという伝記上の事実以上に、かかる経済的な、階級的な基礎から理解さるべきであろう。

さきに挙げた彼の主張のⅡ、Ⅲ、Ⅷ、から、このような小生産者的な内容を見出すことはきわめて容易である。彼はその快楽説を、

市民社会の是認のためではなく、その批判のために用いたから、現実の財産制度を支配する法則を探究するよりは、その制度自体の哲学的、道徳的意味を問題とした。彼はマルサスとの論争に際して、一友人に宛てた手紙で

「私は、政治経済学と呼ばれるもの、即ち収入、資源、商業および生活手段等の計算については、それらが、社会における人間の道徳、独立、幸福についての私のより性に合った研究との関連によって必要だと感じた時だけ、時折学ぶに過ぎなかった。」[12]

といっている。またブレイルスフォードは、ゴドウィンは工場を見たことも資本について聞いたこともないかのようだと述べ、[13] プリーストリーは、それは十分考えられると言っている。[14] 彼の時代には、社会の経済的基礎を客観的に把握して、それを総体として説明し得るのは専ら支配階級であったから、経済学は市民社会を確立する意味においてのみ革新的であり、社会自体の批判は、経済学の外で行われねばならなかった。その極端なものは、資本主義を嫌悪するのあまり経済学にも敵意を示したロマン主義者達で、ワーズワース、ブレイク、シェリー、バイロン、キーツ等が数えられる。[15] 特にかのトマス・カーライルが、「功利主義という怪物と陰惨科学（ディスマル・サイエンス）、即ち経済学とは、全然同一なる致命的誤謬の相異なれる方面だ」といったことは、功利主義の一面の解釈として興味深い。そして彼等の理論の一般的な基礎がゴドウィンであったことは、よくその意義と限界とを示すものである。

そこで、彼に社会の総体的把握の手段を提供したのは、フランス啓蒙思想であった。経済分析を拒否した場合、社会の運動は当然に個々人の意識的な行為の中にその原動力を見出さねばならない。ここに心理学、倫理学、政治学が、広く道徳哲学の名の下に、十八世紀の思想の中に君臨していた意味があるのである。ニュートンが自然界の力の法則を発見したと同じように、ドルバックはその倫理学説を幾何学に似た精密科学に、エルヴェシウスは実験物理学に似た精密科学に完成しようとした。ゴドウィンにとっても、「物質界の出来事においてはあらゆることが必然に支配されることが認められる」[16]のだから、「更に進んで、物質についてのこれらの推論を、心に関する理論の説明に適用」[17]することになる。そうして得られた精神の因果法則は、人間は快楽を求めるということ、しかも高度の理性によって啓蒙された快楽は、全く利己心を脱して他人及び全体の利益と一致するということ、現実の不完全な社会制度は、きわめて有害な結果を生んでいるが、理性が知識によって更に伸張すれば、人間の行為は疑いもなくこの功利の原理に無限に強く影響されて、平等な財産制度にまで到達するだろうということであった。[18] ワーズワースはこの論旨に打たれて、テンプルの一学生に「汝の化学の書を焼きてゴドウィンの必然論を読め！」と叫んだと伝えられる。[19]

このような考え方は、経済学におけるスミスの調和観と同じように、楽観的な形而上学であったが、しかもなおきわめて豊富な内容を含んでいた。彼は、理性による社会の変革という空想性を持つ一方、社会の運動法則の客観性を感じて、これを唯物論的な因果法則として理解し、人間精神に対する環境の相対的独自性を認めていた。同時にまた、環境の変化による人間性格の可変性を強調して、「すべては絶えざる変動の中にあり、不変な、永久的なものは何一つない」[20]という発展の見地に立って、彼の理論の著名な特徴である進歩観に到達している。そしてこの完全な社会へ向う必然を貫徹するために、個人の独立と完全な自由を主張した。一般に無政府主義者は熱烈な自由主義者であるが、ゴドウィンもその例外ではない。この自由に脅威を与えるものが、宗教と政府であり、その不正の極が、私有財産であり支階配級であった。

彼は無政府主義の最初の理論家[21]とされている。けれども、権威に反撥する伝統は、ルネサンスと宗教改革以来かなり一般化していた。カソリックの権威が揺いだ時、ロックは寛容を主張してゴドウィンに先鞭をつけたし、[22] スピノザ、ヴォルテール、ディガーズ、スミス、ペインがその伝統の中に算えられる。更に彼の無政府主義に貢献したものは、スイフト、[23] マンディヴィル、ヒューム、マブリとオウグルヴィ、[24] ピェリタニズム[25]等も挙げられるが、最も大なき影響を及ぼしたのは、あらゆる権威を攻撃した「人間不平等起源論」の著者、農民的なルソーであった。[26]

後の共産主義、社会主義にきわめて大きな影響力を持ったこの肢感的な書物から、ゴドウィンもまた二つのものを摂取した。一つは私有財産に対する批判であり、他は理想社会の描写である。もちろ

んルソーの見解を、興隆する産業革命期の彼がそのまま受け容れたというのではない。全文明制度をそのまま救い難い人類の退歩だと理解するためには、イギリスの資本主義はあまりにも若々しかった。彼はルソーが原始社会に描いた楽園を、未来に実現可能な社会に想定した。無知と無能によって支えられていた平和を、理性と完全な人格によって繁栄する優雅な卓越した情趣に置き換えた。だがその底に流れる個人主義と小生産者意識は、依然としてルソーの流れを汲むのである。

ゴドウィンによれば、「財産の問題は政治的正義の全構造を作り上げる要の石（キャストーン）」[27]であり、財産こそは「あまりにも多種多様で、このような短い目録には入れきれない程の他の無数の弊害の根源」[28]である。ここで、不十分ではあるが、彼の批判の対象となっている蓄積財産の制度が、封建制とは区別された市民社会のそれ[29]であることが注意されるべきであろう。

この制度に対する道徳的な批判はつぎの如くである。

1. 財産の蓄積は、直接に奴隷的追従的な従属意識をもたらす。
2. 富の獲得のために永久的な不正義の光景を示す。
3. 富、贅沢のために、人々に不必要な労働を課し、その素質を低下せしめ、知識の進歩を妨げる。
4. 富の不平等から、犯罪、暴力、狡猾、戦争等が生じる。[30]

この制度に対する、やや経済的な批判はつぎの如くである。

「富者達が何かを支払うのだと想像することは、途方もない誤りである。世界にはこの人間の労働以外にはいかなる富もない。富と誤って呼ばれているものは、社会の制度によって或る人々に与えられた、他人を自分の利益のために強制し得る力に過ぎない。……貧しい人々は、贅沢によって何の利益も受けなかった。それは貧しい人々の労働の量を増大させるが、彼等の便益品を増しはしない。彼等の賃金は不変である。それは、以前に八時間労働した時と、十時間労働した現在と同じである。[31]」

「分業は貪慾の産物である。……怠け者や高慢な者をますます飾り立てるために、下層階級の勤勉がいかに広く打ち延され得るか。[32]」

「乞食状態から大身代になるものは、彼が正直で有用だと信じられるような方法によってなるのではない。最も勤勉な人々が、屢々非常な困難をもって漸く家族を飢餓から防いでいる。[33]」

「人間を十把一からげにして、無感覚な機械のように仕事をさせるものは蓄積である。[34]」

それでは財貨の所有はどうあるべきか？　ここに独自の財産論が展開されるのであって、彼は、例えば一塊のパンは、それを最も必要とする、即ちそれによって最も利益を受けるものに属するとした。この利益とは、もちろん高度に啓発された理性によって考えられたものであって、「正義とはあらゆる人間をその有用性及び価値の要求するままに取り扱うことであり、あらゆる事情の下において、一般的福祉の最大量を得るような方法で行動することである。」という彼の正義＝功利の原理の適用である。そしてルソーと共に、奢

簡単な生活様式の讃美、独立と自由と安全の確保、個人の有用性と必要に基く財産の分配等々、没落しつつある独立小生産者の願望のそのままの反映であった。のみならず、彼は革命的な熱情の雰囲気にあっても革命を嫌悪し、革命的団体と自分とを区別し、更に「政治的正義」の後版では個人の財産権を拡張し、財産の安全を強調し、不平等な財産制度は高い文明のために必要な序曲であるとまでいって、現実の財産制度に妥協を示している。けれども、労働階級の下層は無組織、無知であり、上層は「ロンドン通信協会」の平等選挙権・議会制度改革という綱領の限界内にとどまっている彼の時代においては、このような小生産者の意識のみが、その後進性の故に、根本的な体制批判をなし得るという逆説が成り立つのである。ゴドウィンのロマンティシズムは、芸術への実践を通じて営利社会に反撥するロマン主義者達に霊感を与えたのみでなく、啓蒙思想の論理を転用して、直接に蓄積財産制と対決するものであった。そして功利説はやがてプロレタリアの手中に移り、多くの社会主義の体系が自然財産権説から功利財産説に変り、[38] 労働ではなく欲望が分配の基準とされるに至った。[39] 労働運動に対する功利主義の貢献は、ややもすると、ベンサマイトの勢力が唯一のものと思われやすいが、ベンサムの道徳算術の体系が、実は啓蒙思想の国家権力や宗教に対する鋭い批判精神を失ってしまったのを見る時、あたかもロックの真の後継者がマルクスであるように、エルヴェシウスの後継者はゴドウィンだともいい得るものではないだろうか。

侈は単なる虚栄であり、人間を堕落させるものだと説かれたから、また軍隊や従僕や一切の政治機構は不要となるから、彼等を養う労働量は節減され、各人の間で甚まじく分けられた一日半時間という軽快な労働が、おそらく全体の必需品を生産するに十分であろうと計算されている。[38]

このような社会では、一切が個々人の理性によって統治されているのだから、いかなる強制も存在すべきでない。モアにおけるごとき共同の倉庫も、共同の食事も共同の労働も同様すらも、個人の独立をおかし他人の意見に従属させるから悪である。[36] 土木工事等の多くの労働を必要とする場合にも、彼は機械によって結び付けられる経済制度に反撥しながら、機械の労働節約手段としての面に大きな期待を寄せるのである。[37]

かくして、彼の小生産者的な意識は明らかとなろう。彼は、市民社会の成立を示す原子論的社会観、功利主義の影響下にあり、ディガーズやスペンスのように古い農村共同体に郷愁を示すようなことはなかった。そして資本の利己的な支配に対しては、彼はその道徳的な批判によって、〝正義〟の厳格な原理によって、自己の自由と独立を守ろうとする。その楽観は、スミスとは異なって蓄積制度の批判の上に立ち抽象的な人間理性の啓発に頼るものであった。その批判が財産制度の根底を揺がす限りにおいて、それはブルジョアジーの限界を越えるものであり、理性に信頼する限りにおいて、それは小ブルジョア知識階層の限界を一歩も出ない。彼のユートピアは、

注（1） 拙稿「W・ゴドウィン『政治的正義』初版と三版の差異について」三田学会雑誌五十巻五号参照。

（2） W. Godwin; Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on Morals and Happiness, photographic facsimile of the third edition corrected, edited with variant readings of the first and second editions and with a critical introduction and notes, by F. E. L. Priestley, the Univ. of Tronto Press, 1946, pp. xxi-xxvii.「政治的正義」からの引用は全てこの書による。

（3） 彼に影響した思想家は数多い。彼自身は、君主制批判をスイフトとラテン歴史家から、人間性についてドルバック、ルソー、エルヴェシウスから学んだといっているが（P. J., vol. I, p. ix.）、スチーヴンは三つの源泉を挙げ、彼の体系はスイフト、マンデヴィル、ラテン歴史家から古い制度に対する批判を、ヒュームとバートレーから古い理論に対する批判の武器を、ルソー、エルヴェシウス、ドルバックから革命的熱情を学び取った革命的理論の最も端的な表現であり、ベークに対立する原理を、他のいかなる著作よりも明らかに教えるものだといっている（L. Stephen; History of English Thought in the Eighteenth Century, 1902, vol. II, pp. 265-6.）。またプラメナッツは、エドワード、バートレー、ドルバック（決定論）、エルヴェシウス（環境論）、ルソー、マブリ、オウグルヴィ（無政府共産主義）、ヒューム（社会契約説批判・功利主義）、ベイン（社会と政府の区別）を数え（J. Plamenatz; The English Utilitarians, 1949, pp. 89-90）、アレヴィは、ヒューム、バートレー（決定論）、バートレー（観念連想説・必然論・進歩の観念）、エルヴェシウス（理知主義）を挙げて、彼等の全部が功利主義であったから、全部からそれを得たと述べている（E. Halévy; The Growth of Philosophic Radicalism, translated by M. Morris, p. 193）。更にプリーストリーは、「政治的正義」を単にロック、エルヴェシウス、ルソー、ドルバック、マブリ、ベイン、ウォーレス、ベッカリア、モアの断片に分類するのは誤りだとして、プライス等の非国教神学、プラトン、ベークリー、アクイナス、ミルトン、ソクラテス、ストア哲学、シャフツベリイ、ハチソン、フォーセット、ニュートン、ベーク、ホルクロフトとの関連を論じている（P. J., vol. III, Introduction by Priestley）。

（4） P. J., vol. I, Bk. III, Chap. II.

（5） P. J., vol. I, Bk. II, Chap. VI. この章は二版以後、自然権ではない消極的権利を認めるように変更された。

（6） E. Halévy; ibid., p. 202.

（7） P. J., vol. III, Priestley's introduction, pp. 15-16.

（8） Ibid., pp. 26-27.

（9） アレヴィによれば、ゴドウィンは共和論者の中で民主主義

の概念を自然権から分離した最初の人であり、これこそがプリーストリー、ペイン、マキントッシュの混乱した理論から彼を区別するものである。E. Halévy; ibid., p. 201.

（10） モンローは、功利主義を利己主義と相対主義に限るならミルもシジウィックも除外せねばならず、ゴドウィンは不純なところから功利主義の歴史の上で名誉ある地位を占めるべきだといっている。D. H. Monro; Godwin's Moral Philosophy, an interpretation of W. Godwin, Oxford Univ. Press, 1953, pp. 14, 31.

（11） 山崎正一「近代ヒューマニズムの系譜」岩波「現代思想Ⅱ・人間の問題」五六頁。

（12） R. G. Grylls; William Godwin and his World, 1953, p. 182.

（13） H. N. Brailsford; Shelley, Godwin, and their Circle, p. 165.

（14） P. J., vol. III. Priestley's introduction, p. 77. W. P. Hall; British Radicalism, 1791-1797, pp. 29-31. 参照。

（15） この時代におけるロマン派芸術の、ペンサム主義批判については、前記木村氏の論文参照。

（16） P. J., vol. I, p. 364.

（17） Ibid., p. 368.

（18） この世紀の〝自然〟の解釈について、文学的ではあるがウィリーの研究がある。B. Willey; The Eighteenth Century Background, Studies on the Idea of Nature in the Thought of the Period, 1953, pp. 206-207.

（19） W. Hazlitt; The Spirit of the Age, or Contemporary Portrait, 1825, p. 31.

（20） P. J., vol. I, p. 35.

（21） アナーキズムは一切の統治機関を速かに廃止しようとするものであるから、過渡的な統治が必要だと考える点において、ゴドウィンはアナーキズムを採るものではない、という説もある。戸沢鉄彦「国家の将来」一五九頁参照。今日彼の流れを汲むのはアナビアニズムであって、ラスキは、ボダン、ホッブズ、ペンサム及びオースチンによって発展した国家主権の学説を排し、権力を政治的にも産業的にも分散することが個人の自由のために不可欠であり、個人の幸福こそが唯一の標準であると考えた。バーンショウによれば、「この学説は、かの無限の自由の高等な教科書『政治的正義』に記されていることとあまり異ならない。」F. J. C. Hearnshaw; The Development of Political Ideas, 1927. 服部訳一二二頁。

（22） ロックの社会哲学は、経済学上リカードからマルクスを経て、政治学上でゴドウィンと共に無政府主義に到達した。H. J. Laski; The Rise of European Liberalism, p. 117. 石上訳一一四頁。

（23） 彼はスイフトに非常な心酔を示したが、この偉大な諷刺家は元来ヒューマニストであって、その時代の政治、宗教、社交界、庶民生活等に対して徹底した非難、憤怒を示してはいても、現実を逃れ去る（例えばモアの如き）哲学を持ち合わせてはいなかった。彼は進歩の観念を持っていない。ゴドウィンの中で、スイフトが全てを破壊した後で、啓蒙哲学が座を占めた。

（24） J. Plamenatz; The English Utilitarians. p. 90.

（25） G. D. H. Cole; Socialist Thought, The Forerunners, 1789-1850, p. 30.

（26） D. Fleisher; ibid., p. 82.

（27） P. J., vol. II, p. 420.

（28） Ibid., pp. 421-2.

（29） Ibid., p. 453. pp. 464-5.

（30） Ibid., pp. 453-6.

（31） W. Godwin; The Enquirer. 1823, pp. 158-9.

（32） P. J., vol. II, p. 514.

（33） Ibid., vol. III, Textual Notes, p. 212.

（34） Ibid., vol. II, p. 446.

（35） Ibid., p. 484. The Enquirer においては二時間に増加された。

（36） 従って社会主義とは異なる。これと無政府主義との関連については、K. Diehl; Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus 及び H. Arvon; L'Anarchisme. 1951. 参照。

（37） 彼は過渡的に、共同社会内の不正を抑え外からの侵略を防ぐために association を考えた。これを parish, jurisdiction, district 等と表現しているが、これは権力分散のための行政単位であって、農村共同体への復帰とは意味を異にする。Cf., P. J., vol. II. p. 198. 及び C. Hill; The Norman Yoke. in 'Democracy and The Labour Movement, Essays in honour of Dona Torr', 1954, pp. 53—4.

（38） R. Schlattre; Private Property, 1951. Chap. VII, VIII, IX.

（39） A. Menger; Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag, in geschichtlicher Darstellung. 3 Auf. 1891, S. 8. メンガーによれば、「総じていえば、ゴドウィンは近世における科学的社会主義者中の最初の人と見られるべきであって、彼の学説中には、既に近世社会主義及び無政府主義の全ての思想が胎胎している。彼はホール、オーエン及びタムソンに、そして彼等を通じて社会主義の発展の上に、最も力強き影響を及ぼした。」S. 40. 森戸訳五五頁。メンガー説に対するエンゲルスの批判は、「法学者社会主義」大月版マルクス＝エンゲルス選集第十七巻下所収。